

# 交流セッション a

## 3委員会合同セッション

テーマ

# 未来につなぐまちづくり

### 連合会青年委員会主幹セッション 未来につなぐまちづくり

進行 ■ 渡辺由之(連合会青年委員)

現在の日本の住宅ストック数は、日本の総世帯数を超えており、別荘を除いても780万戸で、そのうち賃貸と売却用を除いても318万戸が、長期不在住宅いわゆる放置された住宅として問題視され、この10年間で2.5倍に急増している。転勤、入院、建替えを理由に、居住者がいないため管理不十分となり、防災・防犯性の低下、ゴミの不法投棄、悪臭の発生で衛生面や景観の悪化などが懸念され、今年度「空家等対策の推進に関する特別措置法」が施行された。結果、今現在400以上の自治体が空き家条例を制定している。

### 地域・自治体との連携

発表者 ■ 寺川 徹(京都府建築士会)  
宮下昭彦(長野県建築士会)  
荻澤 篤(新潟県建築士会)

青年委員会では「地域・自治体との連携」をテーマに今年6月に特措法(空き家対策特別措置法)が施行されたことを受け、本セッションでは各地域における空き家対策の状況やまちおこしの活動状況を共有し、改めて各地域における空き家対策やまちおこしの問題点、建築士としての関わり方、他団体や各自治体との連携の手法を学び検討する場とした。

各単位士会青年委員長の協力のもと、事前に各単位士会青年委員会・部会向けに空き家対策・まちおこしの活動状況に関するア

ンケートを実施し、その集計結果を当日配布するとともに、パネルディスカッションのテーマとして活用した。それぞれ異なる状況のもと、空き家対策・まちおこし活動がどの程度行われ、また、その活動にどれだけの青年建築士が関わり、関心を持っているのかを知るべく行った。

パネラーには、昨年のフォーラムで異なる地域環境での空き家対策事業を発表し、連合会会長賞および福島県建築士会会長賞をそれぞれ受賞した京都府建築士会青年部会および長野県建築士会青年女性委員会、また、「にぎわい」が失われつつある中心市街地におけるまちおこし活動を行っている新潟県建築士会青年委員会を迎え、活動のきっかけや自治体との連携手法、経過、現在の状況などを含めたディスカッションを行い、活動の進め方、その他問題点などを取り上げ、情報を共有することができた。今後の各地域での活動に示唆を与える有意義なセッションとなった。

(齋藤 敦/連合会青年委員、千葉県建築士会)

### 連合会女性委員会主幹セッション 未来につなぐ居住環境づくり

2015年に全国女性建築士連絡協議会(以下、全建女)設立25周年を迎え、設立当初から大切にしている「暮らし」について高齢者や子ども

を開催し、地域の取り組みを積み上げてきた。

25年経過した今、これからも安心安全なくらしを確保していくために、建築士として、全県女として取り組むべき課題を探るため、何をどのように取り組んでいくべきかを見直すこととし、大会のメインテーマに掲げたのが「未来へつなぐ居住環境づくり」である。

そこで、「これからの全建女を考える」という目的で、2015年9月に開催した第25回全建女の報告を行った。第25回全建女の基調講演ではこれまでの歴史を理解し、これからを考えようと「全建女の立ち上げと居住環境づくり」と題して、初代委員長の村上美奈子氏に女性委員会発足当時のこと、その思い、全建女の取り組むべき課題についてお話しいただいた。

その後、基調講演を踏まえて「未来の居住環境とくらし方」と題して、3つのテーマ「仕事と生活」「いまの生活について思うこと」「未来のくらし方」について、20代学生から80代までの異業種で幅広い世代の女性4名を招いて、パネルディスカッションを開催した。歴史を理解し、次世代につなぐものは何か、ことは何か、くらしは何か、建築にとらわれず広く「くらし」について考えたディスカッションであった。

(開催報告は本誌2015年12月号に掲載)

### 連合会まちづくり委員会主幹セッション 「歴史と景観」まちづくりで 未来とつながる —— 歴史・景観まちづくりと 自治体連携

進行 ■ 清水耕一郎(連合会まちづくり委員)

はじめに、松川秀幸氏と中西良成氏(ともに石川県建築士会)による発表が行われた。金沢市内には登録有形文化財が103件、指定保存対象物36件、指定有形文化財28件、県指定有形文化財22件、国指定有形文化財12件、国の重要伝統的建造物保存地区にひ



交流セッションa会場風景



連合会青年委員会主幹セッションの発表者たち



がし町茶屋街、主計町茶屋街、卯辰山麓寺院群、寺町台の4カ所は京都と並び全国最多である。戦災で空襲を受けずに済んだことで、200年前の地図とほとんど変わらない地形およびまちなみが残っている。

まちづくり委員会の近年の活動は、こまちなみアドバイザー、歴史的建造物調査、金沢の茶室調査、長町土塀仕様調査、町屋マネージャー制度、金沢町屋情報バンク、金沢町屋流通コーディネート事業、歴史的建造物修復士を養成する金沢職人大学校やNPO法人金沢町屋研究会にも関わっている。

次に、「おくりえプロジェクト」を主宰されている山田憲子氏の発表が行われた。金沢の町屋が減少する状況下で、町屋の最期を彩り見送る「おくりえプロジェクト」。取り壊し前の最期の町屋をどう彩るか、感謝を込め

て送ることで、心をつなぐ「つなぎ隊」がさまざまな演出を試みている。

5回目には住んでいただくことが決定し、初めて「贈り家」もスタートした。この再利用で生まれた「贈り家」も徐々に増え、ものをつなぐ、心をつなぐ、記憶をつなぐ、笑顔をつなぐ、人をつなぐ「おくりえ」の活動の主体である「つなぎ隊」の参加は全国規模である。

いまもお、年間150~200件の町屋が減り続け、再利用には基準法の壁もあるが、伝統文化を残す気構えのもと、なんとか利活用を推進し、つなぎ留めていきたいものである。

最後に、景観まちづくり支援事業を行っている宮崎県建築士会の黒木俊一氏による発表が行われた。建築士会の行う高鍋町景観まちづくり支援事業は、行政とともに多種多様の取り組みを行っている。まちなかワーク

ショップでは、景観に合う模範事業を生み出すための建築計画を提言し、自然な景観形成をつくるために、各団体、各業界、住民意向を把握し、専門知識を注ぎ込み共感を得ることで、景観行政へ助言している。現状の景観は地元の人がつくりあげたものであり、地元の志向性を把握し、研究を重ねることが大事である。

多様な知識と実績を持つさまざまな会員により信頼が得られ、全員のスキルアップにつながっている。これからも支部の管轄する5つのまちへ積極的にアプローチしていく。

日時…平成27年10月30日(金)  
9:30~12:00

場所…石川県立音楽堂 邦楽ホール

## 交流セッション b

3委員会合同パネルディスカッション

テーマ

# 未来につなぐまちづくり — 3委員会の発表から

3委員会それぞれの活動を踏まえ、「未来につなぐまちづくり」について意見を交わした。

青年委員会は、「空き家対策」「まちづくり」「まちおこし」に焦点を置いたセッションを行った。昨年のフォーラムからの1年間の動向として、空き家問題はまちぐるみで、自治会までが関わってくるものであり、そこに建築士がどのように関わってきたかを紹介。また、空き家を通して、まちや住民と継続的に関わってきた事例を紹介した。

女性委員会は、全建女25周年の活動を取り上げた。個人の課題を皆で考えて解決していく考え方のもと設けている8つの分科会の例として、高齢化社会に向かって女性建築士ができることは何か。また、核家族化が進み、家族以外の人が高齢者を見守り、子どもを近所の人たちが育てていく時代が来るのではないか。子どもをテーマとした分科会等を

紹介した。

まちづくり委員会は、セッションが開かれるご当地の持っている課題を取り上げた。また、まちづくり会議のアンケートを紹介した。

次に、「建築士は地域に何を求められているか」について議論した。まちづくり委員会は「空き家対策」と「景観づくり」の上で、住民、行政との連携のための触媒や接着剤の役割を担うのではないかと。青年委員会は住民と連携した活動に主体を置く。毎年各ブロックの活動報告会を聞き、そこでは、気づきによる相乗効果があり参加者が増えている。活動している住民がたまたま建築士であったという立場で関わっていく。女性委員会からは高齢者、障がい者の居宅の設計で対象者、介護者の要望を異業種の専門家と協力することにより、高度な提案ができる。加えて福祉事業に関わっていくことが重要なテーマだと考えている。



交流セッションbのパネリストたち

最後に、共同宣言として、①歴史的建造物やまちなみ、地域の優れた景観個性を未来へつなぐ試みに取り組む、②少子高齢化社会を見据えて、これからのユニバーサルデザインのあり方を考えるとともに、必要とされるコミュニティの復活をめざす、③人材・資材資金を求める前に、今ある現状でできることをまず動く、「ありがとう」につながる活動を行う、④日本建築士会連合会はこれからの活動に意欲的に取り組む地域密着型建築士への協力を、これまで以上に行う——以上を発表し閉幕した。(佐久間保一/福島県建築士会、連合会まちづくり委員)

日時…平成27年10月30日(金)  
13:00~14:30

場所…石川県立音楽堂 交流ホール